

武蔵野日曜集会

われは葡萄樹 汝らは枝なり

――ヨハネ伝第15章1～17節――

1968年5月5日

小池辰雄

聖書のドラマの中に自分を投げ入れる 葡萄酒の宴 私が本当の葡萄の木 宗教と文化 本当の生命の樹 純粹根源現実 「イン」の世界 私は十字架という門 十字架から聖霊へ わが愛に居れ 聖霊の愛が貫流・環流 愛の極致は十字架 キリストに在る信の我 空気の中にいて

【ヨハネ15・1～17】

「我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。² おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。³ 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。⁴ 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。⁵ 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。⁶ 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。⁷ 汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、然らば成らん。⁸ なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。⁹ 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。¹⁰ なんじら若し、わが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。¹¹ 我これらの事を語りたるは、我が喜びの汝らに在り、かつ汝らの喜びの満たされん為なり。¹² わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。¹³ 人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。¹⁴ 汝等もし我が命ずる事をおこなわば、我が友なり。¹⁵ 今よりのち我なんじらを僕といわず、僕は主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、我が父に聴きし凡てのことを汝らに知らせたればなり。¹⁶ 汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おおよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜わんために汝らを立てたり。¹⁷ これらの事を命ずるは、汝らの互に相愛



せん為なり。

●聖書のドラマの中に自分を投げ入れる

どうぞ皆さんは、捨身の体勢でこの集会に臨んでいただきたい。一回一回がとにかく絶対的なものを持っていますので、どうぞ、そういう気合でこの集会に臨んでいただきたいわけです。これは研究会ではない。聖書は、神さまが自らドラマを展開しているところで、そのドラマの中に自分を投げ入れる、そういう体勢でこれに向かわないと、何年やってもダメです。そのことを一番先によく肝に銘じていてください。

「我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。² おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。³ 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。⁴ 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。⁵ 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我にあり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。⁶ 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。⁷ 汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、然らば成らん。⁸ なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。

葡萄といいますが、これは聖書で非常に大事な木のひとつです。最後の晚餐で飲まれたのもこの葡萄の汁である。旧約から新約に至って葡萄の木のこととはたくさん出てきます。今日、それをいちいち当たるわけにいきませんけれども。

●葡萄酒の宴

まあ旧約の一、二箇所を見ておきましょうかね。イザヤ書第5章。

「われわが愛する者のために歌をつくり、

「わが愛する者」というのは神さまのことです。

我があいするものの葡萄園のうたをうたわん。

「我があいするものの葡萄園」というのはイスラエルのことを「葡萄園」と言ったんです。イザヤは詩人ですから。大体、この預言書というのはい詩なんです。

わが愛するものは土肥えたる山にひとつの葡萄園をもてり。² 彼その園をすきかえし

まずよくすきかえさなくてはいいかんですね。

石をのぞきて嘉ぶどうをうえ、そのなかに望楼をたて

「望楼」というのは、葡萄を食いに、荒らしにきますから、そういった狐やなにかが来ない



ようにね。

酒槽^{さかづね}をほりて嘉葡萄^{よきぶ}のむすぶを望みまてり。

これは石でできた「酒槽^{さかづね}」です。その中で足で踏んだりするわけです。

然るに結びたるものは野葡萄^{やぶぶ}なりき。

どうも酸っぱい葡萄であつたと。神さまはせっかくイスラエルの民をこのように懇ろに導き育てたのに、彼らは本当は神さまに従っていなかったから、出来上がったものはとんでもないものであつたということを、こういう表現で言つたわけです。

3 さればエルサレムに住めるものとユダの人よ、請うなんじら我とわがぶどうぞのとの間をさばけ。4 わが葡萄園にわれの作^なたるほかの何のなすべき事ありや。

これ以上仕様がなないじやないかと。

我はよきぶどうの結ぶをのぞみまちしに、何^{いか}なれば野葡萄をむすびしや。

5 然ればわれわが葡萄園になさんとするを汝等につげん。我はぶどうぞの籬^{まがき}をとりさりてその食いあらさるるにまかせ、その垣^{かき}をこぼちてその践^ふみあらさるるにまかせん。

イスラエルはアッシリアやバビロニアにやつつけられても、これはもう仕方がない。お前たちは私の審きにあうんだぞというわけです。

6 我これを荒らしてふたたび剪^かることをせず耕すことをせず、棘^{おとこづ}と荊^{いばら}とをはえいでしめん。また雲に命^{おの}せてそのうえに雨ふることなからしめん。

もう惨憺^{さんたん}たる涸れた荒蕪^{こうぶ}の地になつてしまうというわけですな。

7 それ万軍のエホバの葡萄園はイスラエルの家なり。その喜びたもうところの植物^{うえもの}はユダの人なり。

だいぶちよつと説明を加えてしまつたですが。

これに公平をのぞみたまいに反^{かえ}りて血をながし、

これはヘブライ語で読むとおもしろいんです。「公平」という字が「ミシュパート」という字で、「血を流す」という字が「ミシュパー」という字で、ちよつと言葉のあやになつている。「ミシュパート」（公平）を望んでいたのに、「ミシュパー」（流血）になつてしまつたと。

これに正義をのぞみ給いしにかえりて号呼^{さけび}あり。」（イザヤ5:1～7）

この「正義」も「セダカー」という字で、「号呼^{さけび}」という字が「ターカー」という字で、これも語呂合わせになつていて、似て非なるものになつてしまつたというわけです。そういう、イスラエルの民が葡萄畑の葡萄に例えられた非常に大事なところですよ。

それからイザヤ書25章6節から8節まで。

「6 万軍のエホバこの山にてもろもろの民のために肥えたるものをもて宴をもうけ、久しくたくわえたる葡萄酒をもて宴をもうく。随^{ずい}おおき肥えたるもの



久しくたくわえたる清るぶどう酒の宴なり。

これは非常に祝福された事態ですが。

7又この山にてもろもろの民のかぶれる面おおいともろもろの国のおおえる
おおいぎぬをとりのぞき、⁸とこしえまで死を吞みたまわん。主エホバはす
べての面より涙をぬぐい、全地のうえよりその民の凌辱をのぞき給わん。こ
れはエホバの語りたまえるなり。」(イザヤ25・6～8)

これは終末的希望を謳ったところですが。その終末の希望のところでもやはり葡萄酒の宴
というようなわけですね。葡萄と橄欖と無花果というのは聖書にはよく出てくる。葡萄と一
緒に大事なものは橄欖の木、オリーブです。

●私が本当の葡萄の木

「私は真の葡萄の樹、わが父は農夫である」

と。「私は葡萄の樹の如きものである」とはイエスは言わない。

「私がまことの葡萄の木である。あそこらに生えているのは私を真似したものだ
と、まあいような調子ですよ。」

万物を創造する創造の力を持った神・キリストである。ですので、そこらに生えている
葡萄の木は、神・キリストによつていくらでも生命を与えられているところのひとつの現
象である。野の花を見て、そこに神の栄光を見たというキリストです。

「私が本当の葡萄の木なんだ。私は、いろんなものが私に実は例えられて然るべき
ものだ」

と。キリストは自在なわけです。葡萄の木といえば、このあとに枝とありますから、キリ
ストは葡萄の根幹に当たるわけです。

しかし、キリストが「父」というこの神。神はいわば農夫だと。地上におけるイエスはもつ
ぱら父なる神によつて展開し、生き動きまた在ったわけです。生かしめられ、動かしめられ、
在らしめられているのがこのイエスであつた。今の人はそういうことが嫌いだね。自分が
自分であるつもりで、自由だとか、何だとか。ところが、在らしめられ、生かしめられて
いる。こういう徹底的な自覚がキリストの自覚です。

この葡萄の木そのものは、その根幹そのものは、神によつて在らしめられている。即ち、
在らしめられているのは觀念じゃないですから、在らしめられるためには必ず実力が来て
なければ、在らしめることはありえない。こっちは無能力者なんだから。何ものでもない
のだから。何ものでもないのが在らしめられているかぎりには、必ず神から実力が来ている
わけです。この根幹は神の現象体である。神の力の、生命の現象体です。

●宗教と文化

私は木というものを見て、非常に真理にぶつかったことがある。「宗教と文化」というひとつの論説に書いたようなわけです。木といえば、あなた方が一番先に思い出さなくてはならないのは創世記2章です。アダムがつくられた。2章7節、

「⁷エホバ神 土の塵を以て人を造り、¹生氣をその鼻に吹き入れたまえり。人即ち²生靈となりぬ。」

人即ち「生ける靈」「ネフェシユ・ハッヤー」となった。まさにヘブライ語を直訳してある。

⁸エホバ神 エデンの東の方に園を設けて其造りし人を其処に置きたまえり。

⁹エホバ神 觀るに美麗しく食うに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善悪を知るの樹を生ぜしめ給えり。

「生命の樹」と「善悪を知るの樹」です。

¹⁰河エデンより出て園を潤し……¹⁶エホバ神其人に命じて言いたまいけるは園の各種の樹の果は汝意のままに食うことを得、

思うがままに自由に食べてよろしい、

¹⁷然³と善悪を知るの樹は汝その果を食うべからず。汝之を食う日には必ず死ぬべければなり。」(創世2:7-17)

この神話が含まれているところの啓示的な真理はすごいものがある。人間は非常に知識欲を持っている。これは善悪を知るの樹です。知識欲がなかったら文化は展開しませんわ。

「何を食べていいが、これだけはまずいかなよ」

という。人間が一番誘惑を感じるところの、一番欲しいところの樹は、それは待てと。これがやはりヘブライ的な聖書の宗教の素晴らしいところなんです。

では、アダム・イブはさつさと「生命の樹」をなぜ食べなかったのか。これはゆるされている。生命の樹を食べることをしないで、善悪を知るの樹を——この善悪はいわゆる道徳です——しかし、それがまた「知る」とありまして、行なう樹ではない。善を行い悪を避ける実力の樹ではなかった。善だの悪だのをとにかくわきまえる。観念道徳と、それから知識に向かつての、そういういわゆるエラスムス式角度の文化の世界。みんな人間はこれが欲しいわけです。ところが、この生命の樹——本当は一番これを求めているくせに、一番根源では深層の意識のところでは生命を求めているくせに——それを自覚しない。ここに根本的な間違がある。

学校(D大学のゼミ)で『ファウスト』をやりますけれども、ゲーテさんが、いろいろ哲学も法学も医学も——鷗外さんの訳によると、「あらずもがなの神学も」なんて訳しているけれども——神学もいろいろ究めた。ところが、昔と同じように自分はバカだ。そして、一生懸命で知を求めたが、結局何も知ることはできないということがやっと分かったと。

これがソクラテスの角度のギリシア的な探求の方の知です。しかし、ソクラテスは知行



一致の角度を持っていたけれども。これがギリシア的な文化の展開のしかたです。しかし、これは本ものにならない。残念ながら。それでは、ソクラテスなんていうやつは特別か。特別だけれども、彼は知行一致なんて言っているけれども、その角度だけれども実は、知の奥に彼はあるものを持っていた。ちゃんと畏れるものを畏れていた。「ダイモニオン」というものがちゃんとあった。

「ヤーヴェーを畏るるは知への始めである、もとである」

と、箴言の1章9節かどこかに書いてある。知ることでない。まず畏れることから始まる。ヤーヴェーの言を畏れかしこむ。善悪を知るの樹なんてのはやめて、まずその中の生命の樹がちゃんと分かっているのだから。生命の樹を、

「ああこれは素晴らしい。これを食べたらもう死んでも死なない」

なんて。百寿どころじゃない。「永遠の生命」というわけです。

だから、この神話の中に含んでいるところの、この真理性はすごいものを持っている。本当に知ろうと思ったら、神を畏れて、その中に自分を信じ入れることです。信の世界から本当の知が出てくる。いくら疑って探求したって、信の世界には入らない。これがもう今の若い人たちがみんなほとんど躓いているところの事態です。「聖書研究会」なんて、聖書を知ろうと思っている。ダメだよ、そんなものは。いくら知ったって、それは聖書の知識だけだ。

これは素晴らしい次元からものを言っているんですから、もう無条件にその中に自分を投げ込んでいったら、それからものすごいことが発して、自由自在な、知でも行でもという世界に展開していく。何をなさっても、それが本当のことになっていく。こういうことです。だから、本当は日本の教育はそこから始まらなければダメなんです。

そういう信。畏神だね。詩篇第2篇の中に、

「^{おそ}畏れをもて口づけせよ」

という言葉がある。畏れをもて親しめということです。いわゆる妙な変てこな馴れ親しみではない。

● 本当の生命の樹

それがこの「樹」なんです。善悪を知るの樹、いわゆる文化と宗教が逆さまになっている。まず宗教の世界。それから文化が展開する。宗教の世界は根幹である。

「我は葡萄の樹なり」

とは、

「我は葡萄の根幹なり」

と、もうひとつ読まなければいかん。

「我は葡萄の幹なり、根っこなり。お前たちは枝である」



と。「お前たちは枝である」と書いてあって、

「我は幹、根つこ」

とは書いてないけれども、その木においてこの幹と根つこを読まなくてはいかん。あなた方は、いわゆる文字にとらわれてはダメだよ。その響きの奥を体感していかななくては。からだで受けとつていかないと。

「自分は本当の葡萄、本当の生命の樹だ」

と。

「わが血を飲め。これはわが血なり」

と言ったときに、葡萄酒をキリストは出した。葡萄の汁を。葡萄の汁は血の象徴であり、

「血は即ち生命のあるところ」

という。創世記9章に書いてある。血は生命のあるところで、血を流すようなことはしてはいかんと。

「³おおよそ生ける動物は汝等の食となるべし。菜蔬の^{あおももの}ごとく我之を皆汝等に与う。⁴然れど肉をその生命なるその血のまま食らうべからず。⁵汝等の生命の血を流すをば我必ず討さん。

罰するぞと。

獸之をなすも人これを為すも我討さん。^{おおよ}凡そ人の兄弟人の生命を取らば我討すべし。

生命には生命をもつてするぞと。

⁶おおよそ人の血を流す者は人その血を流さん。そは神の像の^{かたち}ごとくに人を造りたまいたればなり。」(創世記9:3～6)

生命のあるところが血である。その血の生命の中にもうひとつ深い生命が入る。これが霊である。だから、それを霊血という。霊の血という。

²おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、

そんなものは本当に「我にある」のではない。我にあれば必ず果を結ぶんです。

「自分はキリスト教を信じています」

なんて言ったって、頭で信じたってわるくはないけれども、そんなものはレッテル・クリスチャンでござると。

●純粋根源現実

果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。³汝らは既に潔し、わが語りたる言に^{ことば}因りてなり。

これは困ってしまったな。

「私の語った言によって、既に潔い」



という。これはキリストの側からはそうなんです。だけれども、残念ながら、この「汝ら」といわれている連中はひとつもまだ潔くはない。

「私の言が本当にお前たちの中に聞き入れられ、受けとられてあるならば、それはもう既に潔いんだが」

と。実はキリストは知ってらっしゃるんです、その時には。こう仰っていないながら。

「実は本当はお前たちは受けとっていない。私の霊がくるまではこの受けとるということはできないね」

と。これはもうちゃんと知ってらっしゃる。けれども、端的な事實は、端的な現実はいくのごときものだという事を言っておられるわけです。

「わが言は霊なり、生命なり」

と。だから、「わが言は霊なり生命なり」を受けとれば、それはもう既に潔き世界に入っているわけです。「潔き」ということは「神のもの」ということです。神のものになっているという世界に入っている。なにか人間的に汚いの潔いのなんて、そういうことではない。

⁴ 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。

口語訳では、

「わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていないように」

とある。「いよう」というのは少し未来的な言い方だな。ギリシア語はそんなことは書いてない。

「わがうちに汝ら留まれ、しからば、私はお前たちのうちに」

と。それだけのことはなしだ。「いよう」とか、「おらん」なんて、なにか多少可能性に関するような言い方はしてない。

「私のうちにいなさいよ。そうすれば私はお前のうちだよ」

という。

「そうすれば、うちにいてやるかもしれない」

なんていうのではない。たとえこんなことに訳してありましても、皆さんは読むときには、

「我に居れ、さらば我なんじらに居る」

「私はお前たちの中にいる」

と。「つながる」というと、なにか外側からつながっているような感じがするけれども、この「つながる」という訳はよくない。「中に宿る」方がいい。

「わがうちに宿れ」

と。お宿です。これはやっぱり現実が本当につかめてないから、こんな訳し方をする。なにか分かりやすくて何かとか。ただ言葉の上で分かりやすいなんてものはひとつも本当の訳ではない。分かりにくくたっていい。もうひとつの奥の世界では本当にわかりやすいんだ、



それが。

「私に居なさい。そうすれば、私はお前たちのうちだよ」

と。私はどうしても新約聖書を自分で訳し直さなければいかんと思っている。力がぬけてしまうよ、こんなことを言われるとね。

どうぞ、皆さん、聖書が力の抜けているような訳し方をしたら、讃美歌も「何とかであらん」なんて書いてあつたら、「なり」というつもりで歌っていてくださいよ。とにかく、道を歩いているように何をしようが、すべてが時々刻々にその現実——純粹根源現実——でもいうかな——そういう純粹根源現実の中に自分を投げ込む在り方が、これが信というものです。なにか少し楽になつてきましたか。

「それは一体、どういうことでしょうか？」

なんて、考えたつてダメだよ。

「我思う故に我在り」

なんて、ちつとも在りはしない。

「われ突入せり。われ尻餅をつけり。されば、われキリストのうちに在り」

なんてなわけです。

「私の中に居なさいよ」

ということですよ。

●「イン」の世界

内村先生はヨハネ伝の解釈がない。内村先生はもっぱらパウロなんだな。そこにやはり無教会の限界がある。もちろん、ヨハネ的なものもおありだったでしょうけれども。それはパウロさんだつて本当は「イン」(中)の世界です。もうペンテコステを通つたパウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、みんなこれは「イン」の世界。「イン」でないものはみんな本ものでない。必ずしもそうとは言わないけれども、もう非常にそれはレッテルでズレがきてしまっている。

「中」という字は素晴らしい字です。貫いている。「内」^{ない}という字もそうなんだな。なにか枠の中に入っていくから「内」という。外にはいないという(笑)。そういう、

「我に居れ、さらば我れ汝らのうちだよ」ということ。

枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、

「木と枝」とか言ったから、「つながる」なんて言つたんでしょけれども。

汝らも我に居らずば亦然り。

これはもうその通りです。根幹から切られたら——この花は今水でもって咲いているけれども——みんなしおれてしまう。



⁵我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。

これは非常に大事な言葉です。

「汝ら我を離るれば、何事も為し能わず」

と。

「それだつてできるじゃないですか」

なんて。ああできますよ、ある程度は。それでみんないい気になっているわけです。けれども、

「本当の力ある行というものは、天的な果を結ぶようなそういった行を為すというようなことは、私を離れたらダメだ」

と。すべてこのキリストの言葉は同時にキリスト自身の告白ですから。

「私はお父さんなる神さまを離れたら何もできない」

と。イエスは文字通りそうです。イエスは神さまを離れたらもう全然ダメです。世界最高の人間が最低のひとになってしまう。一番ダメのカスになってしまう、イエスというひととは、ところが、相手は絶対者の神ですので、これと連なっているから、もの凄く展開していく。だから、

「私を見たものは父を見たんだよ」

と、はつきり言えるひとです。

「私を見たものはキリストを見たものである」

と言えるクリスチャンだったら、これはもの凄いいことです。ペテロはそれを言った。

「我を見よ」

と。跛者がなにかお金をくれるかと思つて、手を見てたでしょう。ペテロが何をくれるかと思つて。

「我には金銀はない。しかし、わがうちにあるところのものを汝に与う。イエ

ス・キリストの名によりて歩め」

と。その言葉が直ちに力でありましたから、跛者が歩いてしまった。これが「わがうちにあるところのもの」であつた。「われを見よ」との「われ」であつた。

「わがうちなるものを見よ」

と、そんなことを説明的に言わない。「われを見よ」といきなりやった。そうしたら今度は、

「この人は素晴らしいなあ」

と言つて、みんながペテロを見たから、

「なぜ、私を見るか」

と今度は言った。ペテロは全然反対のことを言った。あの時の使徒行伝4章のペテロは凄いですよ。



「なぜ、私の信仰なんかを問題にしているか。私の信仰でも何でも無い。ナザレのイエスだ」

「われを見よ」

という言葉と、

「われをなぜ見るか」

という言葉が本当に一つなんです。そういう見方ができなければ本ものでない。

この私なんかはどうだっていいよ。惨憺たる人間ですから。この惨憺たるものの中のものを見てください。それでなければ、私はあなた方に何回集会しても、これいたずらです。しかし、ただ一辺の集会でも、わがうちなるものを見てくだされば、それでもう十分である。だから、

「私に居なければ、わがうちに居なければ、インの世界にお前たちの魂がぶち込まれていないならば、何をしたってダメだ」

と、その反対をまた見なくてはいいかん。

「キリストに、あなたの中に私は居れば、私は何でもできます」

「お前を通して何でもやるぞ」

と。そういう関係。私はこういう言葉を読んだら、もう実は話なんてするのがいやになってしまう。皆さんとこれをじつと読んで、あとはもう沈黙で祈って、その中に入るのが一番いい集会なんです、本当は。

「私を離れたら何もできない。しかし、私のうちにあるならば何でもできる」

と。ナポレオンが「不可能」の字を字引から消したというが、あれはちよつと自分の英雄的な気合でもってやっていったんだけど、しかし、英雄的な意気込みはどんなに素晴らしいくても、とうとうダメだ。セントヘレナに流されて、福音書を開いたら、まあなんとイエスというひとは素晴らしいひとだと。

「聖書は本ではなかった。生き物だった」

と彼は言った。私はさすがにナポレオンだと思った。最後の瞬間にナポレオンはとにかく地獄行きを免れたかなんかしらんが。

天分に非常に恵まれた人は、さっきの知の方でもって、知行の方でもって突っ走るから危ない。まず本当に畏神の、平伏すことをしらない人間は絶対にダメです、畏るべきものを畏れない人間は。

「人の上に人なく、人の下に人なし」

という福沢諭吉の言葉がなにか金科玉条みたいになってしまつて、それで民主主義なんてやって、

「人の上に神ある」



ことを忘れている。傍若無神^{かたわ}という。傍ら神無きが若く^{ごと}。今の大体、日本の人はみんな傍若無神なんだ。

●私は十字架という門

もうこれを読んでいると、キリストが慕わしくてしようがなくなりましたか。そういうことですよ。だけれども、

「それではどうしてキリストの中に入りましょうか」

と。一生懸命で聖書を研究したり、善き行いをやろうとしたり、やっているけれども。それはご苦労さんなはなしだ。ちゃんとここがあいている。キリストがちゃんとやっているではないですか。

「我は門なり」

と。入れないことはない。

「私は門だ」

と。十字架という門だから、ここの門は誰でもが入れれる。

ただし、これは狭き門ですよ。何か携えて入れない。自分の何かをもって入ろうとしたつてダメだ。あるがままの自分だけ。あるがままの自分だけで入る門だから、この十字架の門は。

「これだけ聖書を勉強しましたから入れてください」

とか、

「これだけ人を救いましたから入れてください」

とか、そういうことではない。

「何年教会に通いましたから入れてください」

でもない。

「少しまだ今、精神分裂だから遠慮しておきます」

でもない。何でもない。とにかくあるがままの自分が入れるところがキリストという十字架です。

この門を入ってみたら、あるがままの自分の奥に、知らないところのあるひとつの場ができてしまう。本当の本我^{わが}が、そこにあるところの、宿るべきところのものができてしまう。この本我は、本来「神の似姿」につくられた元の姿のところができた。この元の姿の霊に聖霊が入ってきた。どんなに微か^{かす}でも、どんなに無力であっても構わない。その贖われた我というものが、相変わらずダメのカスでいつこう差し支えない。しかし、このところに聖霊が入ってくると、似姿につくられた私たちの本来の我がその実力を、その実質に還元されていく。元に還っていく。それが即ち、聖霊における新しき「第二の亚当」とパウロが言っているところの我です。

これが「イン」の世界。だから、はつきりとキリストと一つです。問題ありますか。何



もないでしょ。それだけの話ですよ。考えることも何もありはしない。

その世界に平伏しの祈りで入ってください。入るすがたは何か。祈りのすがたである。平伏しとは何か。祈りの極致です。そういう平伏しの祈りのすがたで入っていけば、

「ああ、あそこに私はもう全部、十字架されてしまったから問題ない。そうでした、あなたの中でした。いや実にはあなたはまた私の中でした」

と。その現実には、もう誰が何と言おうと、それを否定するわけにいかん。

●十字架から聖霊へ

⁷ 汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望^{のぞみ}に随^{したが}いて求めよ、然^さらば成らん。

「汝らもし私の中に居り、私の言がなんじらの中に入ってくれば」

と。「言が入る」というのは、これもまた、キリストと言は一つですから、キリスト自身が言なんですから。何かキリストの語っている言葉の意味ではないですよ。言そのものが実は、キリストの生命の発露、発動しているところの何ものであるにすぎない。彼の行為そのもの。そういう言も行もキリストと分割して考えられるようなものではない。

だから、ペテロが

「キリストの名によりて」

と言っているときに、もうペテロの言葉の中にキリストの霊が宿っていますから、ウワーッと働くわけです。そのような事態。だから、「わが言が汝のうちに」というのは、「わが霊が」といおうが、「わが言」といおうが同じことです。霊と言とは離すことができない。私たちの集会は、御^{みたま}霊・御^{みことば}言の集会です。この二つは離すことができない。その御霊、御言は全くこのキリストにおいてあるところの事態ですから。

何にても望^{のぞみ}に随^{したが}いて求めよ、

もうキリストの言が中にあるんですから、キリストという言が中にあるんですから、「何にても望む」というその望みの内容が、悲願が、私たちの悲願が霊願と一つとなっています。悲願・霊願あるいは本願といってもいい。キリストの霊の願いとわが悲願とが一つになる。悲願・霊願、一如の世界で願っていくことはグングンと成っていく。悲願即、霊願、というように事態になってくる。

禅宗の世界でも同じようなことを言っている。「即心即仏」というのもそうです。この心が直ちに仏に即する。こないだから申し上げている「即如」という世界。「即死一如」の世界です。

内村先生もローマ書6章のところを書いたときに、このバプテスマのことを言って、

「本当のバプテスマは一つになるところの事態である」

と。内村先生の書いた文章の中で、私はおそらくこれが一番最高の文字ではないかと思う



くらいです。残念ながら、先生はその線をもつとグングンと積極的に展開なさらなかったところに無教会の限界があるんですけれども。先生はそういう世界を知らないわけではなかった。

「キリストに同化された者、キリストの活ける体の一部分となった者、その困苦と歓喜くるしみよろこびと、その恥辱はづかしめと栄光さかえと、その死と復活とを、彼の内にあって彼と共に父なる神から分与された者、これがキリスト者である。「信じる」とはこの場合においては知識的には認めることではない。また感情的に信賴することでもない。キリストを信じるとは彼の神格の内に私の人格を投入することである。そうして私をなき者として彼を私に代わって私の内に居させることである。これがすなわち信の極みであって、キリストは私たちにこのような信仰を要求なさるのである。キリストが神であり、霊の宇宙であり、私たちがその霊界の一部分となることができて、初めて私たちの聖化も満足に行なわれ、またキリストの光は私たちを通して世に顕あらわれるのである。」(内村鑑三『一日一生』5月31日)

これ以上の文字を私は内村先生で知らないといっても過言でないかと思います。

ところが、無教会では

「十字架、十字架」

と言っている。十字架止まり。十字架は止まらないんです、本当は。十字架の中に本当に入れば必ず、狭き門より入ったら必ず、もの凄い広い霊的空間に入る。無際限の世界に入る。パウロがあれだけの凄い力をもつて展開し、喜びをもつて伝えるところの事態は単なる十字架ではありません。本当に十字架されると、その次にこの甦りの生命、聖霊をいただいたから、パウロはあのようになったんですよ。ペテロもヨハネもみんなそうです。福音書のペテロは波の如きと私は言った。ところが、波打つ世界からペテロはもう成層圏的なところに突入してしまった。

生まれつきの皆さんがどうあろうと、そんなことはどうでもいいんです。

「私はあの人よりも性格的にどうの、才能がどうの」

と、そんなことはどうでもいい。そんなのは五十歩百歩だ。問題は、その世界に引き入れられること。キリストの引力が天極から来ているんだからね、ウワーツと。

「無教会主義」なんていう。それは内村先生が、

「あまり形式的な教会が多いから、それはいかん。もう形式は要らん」

というので、歴史的に「無教会」というものがあつた。教会をぶっこわせというのではないですよ。

「あつたつて結構ですが、なくたつて大丈夫なんだ」

という角度から内村先生は「無教会」とか「無教会主義」とか言つたけれども。なにか主義にこだわつたら、執したら、絶対化したら、これはパリサイになる。今の無教会がだい



ぶパリサイ的な色彩を帯びているような面もあるようだが、それは困る。そういうような傾向が内村先生の晩年に既に表れたものだから、

「私は、今はやっているような無教会主義ではないぞ」と内村先生は言ったんです。

内村先生の中心は十字架であるけれども、今度は十字架が一点張りで、十字架の背後にあるものを忘れてしまったらば、今度は内村先生をまた観念化し、硬化してしまう。無教会というものは硬化してしまう。そこで本当の自由闊達な使徒的現実には入ってこないことになる。多少、内村先生自身にその責任はなきにしもあらず。けれども、内村先生のあの素晴らしい文章や行為はもう実は聖霊の世界から発しているんですよね。そのことをもつと内村先生は積極的になさってくれたらよかつたんだけれども。それでなければ、こんな文章はでてきつこないです。ところが、エピゴーネンが、亜流たちがそれにまた躓いてしまった。

●わが愛に居れ

何にても望のぞみに随したがいて求めよ、然さらば成らん。⁸ なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。

「望に随いて求めよ、然らばすべて与えられて成っていくぞ」

と。「成らん」ではない。

「成るぞ、成っていくぞ」

という。根源現実が展開していくぞと。そうすれば多くの果が結ぶ。たくさんそこに成果がなっていくが、それはなにもお前たちが自分で私するための成果ではない。それはみな神さまの栄光の表れとして、

「ああ、うれしいなあ」

といって、あなた方は讚美する。私たちは讚美せざるを得ない。果は即ち神の栄光の表れで、なにもでもない。自分がしたのでもなんでもない。自分を通して神さまは、それぞれの人を通してその人でなければできないことはしますよ。それは神さまはそうにつくつてあるんだから。しかし、その人でなければならぬことも、甲でも乙でもみんなこれは千差万態に表れる神の栄光の顕れです。

それが本当の私の弟子だということ。キリストは「弟子」と言おうが、「友」と言おうが、同じことです。友でもあり弟子でもある。これぞ本当の味方だぞと。

⁹ 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。

さつきは「我に居れ」が今度は、

「わが愛に居れ」

ときたです。「我に居れ」ということの内容は何かというと、この「私の愛」はもちろん生



命的な愛です。

「私は父に愛されて、父の我を愛し給いしごとく」

と。どうしたら愛したかというところ、父に平伏し全托したら、

「我れなんじを愛しむ」

という声が聞こえてきたんだから。皆さんも、祈りの世界でそれが聞こえてくるわけですよ。本当に私心が断たれていますとね。

「そうだ。今度はお前を使つて、やるぞ」

というわけです。ここに、

「我の父を愛せしごとく」

とは書いてない。

「父の我を愛し給いしごとく」

とある。

「私がお前たちを愛している。私の愛が入れば、お前たちは私とは本当に親しくなる。それからその愛が必ず人に溢れていく。」

と。ということは、その喜び、その愛を人に伝えないではいけないようなことになってくる。聖霊の世界はみんなそうです。観念信仰だと、何か「自分たちは」といつて、自分たちの中にしまつていくような気持です。そんなものはみんな枯れてしまふよな。全部これが流れていく。流れ流れて果てしらず。それで、与えれば与えるほど豊かになるものは何か。これキリストの愛なりと。

●聖霊の愛が貫流・環流

本当にそのようにこのキリストを映す。

「我は月、月は我かとわかぬまでのどこかにすめる秋の夜の月」

という歌があるね。月を眺めていて、自分が月か、月が我か、わからないまでのどこかにすめる秋の夜の月なんてな、もう主客未分の世界。

「映すとは水もおもわず映るとは月も思わぬ広沢の池」

という。水は映すとも思っていない。映すとは水もおもわず、映るとは月も思わぬ広沢の池。その池を見ると月が光つて水に映っているが、月も無心であり水も無心である。しかしながら、それは本当に一つになっている。これが月影を宿す世界です。「映る」と言うよりか、「宿す」と言った方がいい。月影を宿す。いつか私が「田毎の月」の中で書いたでしょ。あの境地です。

10 なんじら若し、わが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。

キリストにおいては誠命も愛も一つなんだよな。誠命は楽しいからです、言葉が。うれ



しくなかったら、誠命はもうこれはいかんですよ、そういう世界は。これはこういう言葉が躓きになる。

「わが誠命をまもらば、我が愛におらんと。」

「さて、キリストもいろんな誠命を一生懸命で守って、それでなければ愛に居ることができない」

なんて、そういうように考えたら、これはもう躓きになるよ、こういう言葉は。

父の言を受けとる。日本語は「守る」というと、なにかちよつと妙な感じだが、それを本当に受けとると――「受けとらば」と訳したらいい――父の誠命を受けとって、その命にこれ全托して従っていたらば、もの凄く父の愛が実はその誠命の中にあつた。言葉の中にあつたことがわかりますから。まあそんな角度で言われたんでしょね。

11 我これらの事を語りたるは、我が喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の満たされん為なり。

「喜悅」と言っているでしょ。福音、喜びの音信。愛とか、生命とか、光とか、喜びとか、みんなこれは一つです。その証拠には、聖霊を受けますとね、もう本当に喜びの人になる。そして、何かしらんけれども、温かい熱い人になってくる。

12 わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。
そう言つて13節にくると、

13 人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。

みんな上から、キリストから愛を一人ひとりがいただきますと、それが環^わとなつて流れる。環流する。これが、

「互に相愛せよ」

ということですよ。キリストぬきにして、「互に相愛せよ」なんて言つたつてダメです、そんなものは。そんなものは社交的な何かだ。これはみんなもうグルグル――キリストから聖霊の愛が貫流、貫き流れてくると、お互いに間で今度は環として流れる。これは環流する。貫流は即ち環流となる。

●愛の極致は十字架

そして、

「人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はない」

と言われたが、もう一つ大きな愛があつた。それは敵のために生命を棄てる。キリストはそれをやつた。

「汝の敵を愛せよ」

これは最高の愛です。キリストは、我々背ける者、敵――まだ味方ではなかった――その



ために生命を棄てた。

「友のために生命を棄つる。これより大いなる愛はなし」

と。お互いに本当に命懸けの友情である。命懸けの友情。そういう友情が、昔はとにかくある意味においてあつたですよね。けれども、今はもうなんだか、友だちをも裏切ったり、蹴飛ばしたり、策略でもつてね、なにか自分がいい子になろうとしてみたり。本当の「フロイントシャフト」（友情）は、敵に、相手に、友に譲る。

「私は落第したから、友が入学した」

なんていつて喜べという。

それは、神さまの、キリストの愛を本当に受けたらば、力があるからね、この愛は。メソメソした愛ではないですから。もの凄い力を持った愛ですから、相手のために生命を棄てた者は実は本当の生命の世界に入っていく。

「わがため、福音のために生命を棄てる者はこれを得ん」

とキリストが言つたのはそのことです。ということとは、「得ん」と言つてもいいし、もう既に持っているから、いくら棄てたつて失せないんです、ある意味において。

だから、殉教者たちが本当に素晴らしい殉教をしていたのは、彼らは本当に勝つていたからです。本当の勝利者でなければ、殉教ということはできない。ペテロもパウロもそういう殉教の死を遂げた。相手を救いあげるために。しかしながら、敵は相変わらず――たとえば、先駆者であるステパノはパウロに石で撃たれたような人ですよ――パウロはステパノを殺すのをよしとした。ステパノは、

「彼らは為すことを知らず。赦してやってください」

と。彼は天界へ凱歌をあげて行つた。それでもなお、パウロはまだ目が醒めない。その素晴らしい愛を見ながら。とうとう、ダマスコ途上でキリストにぶつ倒された。しかし、その底流をなしていたものはステパノの愛であつた。

相手に本当の愛の生命を与えるもの、そういった担いの愛は私たち生まれつきの者にはない。それはキリストが来なければ――お釈迦さんでもいいですよ。仏教なら本当にその世界に入れば――福音なら本当にキリストの世界にその意味において入れば。大慈大悲の世界です。

そのような今、愛のことをキリストが、

「我の汝らを愛し、汝らも我を愛したり」

と言うがまだ、キリストは「愛した」と仰つたつて、それは今までの愛ではまだキリストは本当は足りなかった。

「もう一つお前たちに本当に愛を全うする」

と、その愛の極致が、いうまでもなく十字架であつた。

キリストという根幹の中に私たちが本当に連なつてある、一人びとりが枝々である。パ



ウロが人間のからだに今度は例えた。

「キリストは頭で、私たちはその身体で、一人びとりはその四肢である」

と。これはコリント前書12章とローマ書7章に書いてある。そういうような、どっちみち、パウロは「人間の肢^{えだ}」といい、ヨハネは「樹^きの枝」と言いましたが。要するに、キリストの身体に、キリストに連なっている。信とはそのような宿りの世界、切っても切れないところの關係に現実にあるところの、さつきから申し上げている「イン」(中)の世界です。もう、はつきりしたですね、いわゆる信仰なんてものでは間に合わなかったということが。

●キリストに在る信の我

パウロの言葉を少し引用してみましょう。コリント後書5章17節、

「17人もしキリストに在らば

これも、「の中」にあることです。キリストの中にあるならば、

新^{あらた}に造られたる者なり、古きは既に過去り、視よ新しくなりたり。」(コリント後5・17)

新人となるのは、キリストの中に入らなくては。あなた方はそうやって私の話を聴きながら、ちよつと目をつぶって、「中に」という世界を今、現実を受けとりながら聞いている。ギリシア語のこの「宿る」という「メネイン」という——ドイツ語の「ブライベン」、英語の「アバイブ」にあたる——そういう境地にグングンと自分を入れてなかったら、せつかくこれだけの集会も空しい。しかし、もはやあなたは空しさがやって来なかったと思いますけれども。そういうように、

「キリストの中にあるならばもう新しいんだ」

と。内側から新人となる。

「内なる人は日々に新たなり」

なんてパウロが言っているでしょ。同じコリント後書4章16節あたりに、「日々に新なり」と。ローマ書8章は断然たるところです、この内なる世界は。ローマ書8章はもう暗記していいところです。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は

「に在る者」というのは「の中に在る者」です。みんなギリシア語ではそうですよ。

「エン・クリストー」(キリストの中に)

です。中に在る者は、

罪に定めらるることなし。

「相変わらず躓いたり、転んだりしたけれども、そんなことでは中に在る者は動かないぞ」

と。もはや根底的に罪に勝っている。私たちは相対的我としては罪に負けますよ。けれども、



絶対的な我、キリストに在る信の我は――現^{うつ}の我は、相対的現の我は罪に負けようが――キリストに在る信の我は、にもかかわらず、既に勝っている。

「救われている」

ということは

「勝っている」

ということです。十字架を無条件に受けとり、御霊を無条件に受けとっている者が、どうして救われないか。救われているんです、ちゃんと。それがその現実として救いの世界に入ってしまったって、本質と現実が一如のことになるには、これは地上ではなれない。地上では必ずそこにひとつのズレがあります。いいです、そんなズレは。ただし、

「本ものがあるか」

ということが問題なんです。だから、

²キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、

生命の御霊の法則は、

なんじを罪と死との法より解放^{とき}したればなり。」(ロマ8:1～2)

と。このローマ書8章1節、2節は凄いです。9節で、

「⁹然れど神の御霊

「キリストの御霊」と言ったって同じことです。

なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。

汝らは肉にはもはや居ないで霊に居るのである。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

キリストの御霊なき者はキリストに属している者ではないと。もうそれで、パウロも「イン」の世界ははつきり言っているわけです。ドイツ語で「グラウベン イン、クリスト」であって、「アン」ではない。「キリストの中に、在るところの信」です。

¹⁰若しキリスト汝らに在^{いま}まさは体^{からだ}は罪によりて死にたる者なれど霊は義によ

りて生命に在る。」(ロマ8:9～10)

と、いろんな言葉でパウロが言っている。

●空気の中にいて

だから、聖霊の世界に入ってしまったと、聖書はもう楽に読めるようになる。そうでないと、「さあさあ」といって、これは大変なことになってしまう。それは普通、大変なことになっている。ちっとも大変ではない。福音書では、キリストでないやつはみんな大変なんだ。どんなによさそうにみえても、それはまだ本ものの世界ではない。キリストだけが本ものだ、福音書では。もうはつきりその対立がみえている。ところが、使徒行伝や書簡にくるといって、中に入ってしまったものだから、その中からものを言っているから、「について」はひ



とつも語っていませんよ、彼らは。聖書は、「キリストについて、神について」なにか説明している本ではありません。その中からものを言っている本です、中から。

もうそれくらい私は、まあ皆さんと今日は「中」の世界です。私はどこにしようが、これは空気の中にいるんだ。この空気から離れるわけにいかない。空気の中にいて、空気は吸っている。そのように、私がどうあろうと、私の信仰がどうあろうと、キリストの絶対恩寵に圧倒されているから、もう中にいて、中から出ようとしたって、これは出られないんです、正直。出られないくせに、躓いたり転んだりするわるいやつだけれども。そういう事態が私たちに与えられている。

「我れキリストと共に十字架せられたり、もはや我れ生くるにあらず。キリス

トわがうちに在りて生き給うなり」

とパウロが言った。これは本当にそうです。

詩篇81篇に葡萄の樹がズーツと地の果てまでも樹の枝が伸びていくという素晴らしい詩篇がありますが。ただ旧約的角度がそこに混ざっていますけれども、その詩篇81篇にそういった祝福された事態が書いてあります。そして、この「霊」とか「血」とかいいまでも、みんな葡萄の汁がそういった霊的な事態を象徴して表している。

「我を喰らい、我を飲め」

というのもみなそのような「中」に入っていく。ヨハネ伝5章、6章あたりの消息もみなそれです。

どうぞ、皆さんは、聖書の読み方のひとつの呼吸がだいぶ呑み込めてきたと思いますので、そこを大胆率直に進んでください。ゲーテが『ファウスト』の中で、

「生命の樹は緑色である。理論の樹は灰色である」

なんていうようなことを言っていますが、全くそうですね。あれはメフィストが学生に言っている言葉だな。²⁰³⁸行から、

「友よ、一切の学説とか理論というようなものは灰色である。生命の黄金の木は緑色である」

と。黄金色の果のなっているところの木、この根幹に連なっている枝。花が咲き果が実る。そして展開してやまずと。そういう皆さん一人ひとり、もう人生は何がきても絶対に行き詰まりはありませんから。そのかわり、これがなかったら、どんなによさそうでも、結局行き詰まりです。

